

## ピレネーと、南フランス・トゥールーズの 地域フランス語の“言葉”

杉 山 朱 実

### はじめに

1989年から、フランスでの生活をはじめ、フランス・トゥールーズでの大学院生活を開始し、その後、修士号・DEA・博士号の取得まで、多年に渡り、フランスでの滞在を過ごした私であったが、“言葉”の面で、困った場面には、最初から一度も遭遇しなかった。

日本で習った「標準フランス語」をスタンダードに日常生活では使用していたが、困った場面に遭遇することは、けっしてなく、かえって通常の暮らしをしている地元の人々から、時間を聞かれたり、道を聞かれたりした。また、いつも行く“モノプリ”のスーパーでは、「今日は、お肉にしようかな?」と買い物に出かけたのに、顔見知りの、元気なお兄さんが「今日は、新鮮な魚が入ったから、今晚の夕食は魚にしたら? いっぱいパセリをつけてあげるから。」と声を掛けられ、その日の夕食は、「パセリのみじん切りバターソテーの魚」に代わってしまったこともあった。パン屋さんでは、当時、バケット(棒パン)が3フランしたが、お決まりのパン屋さんへ行くようになり、店員の女子と言葉を交わすうち、同じく、大学院で論文作成をしている、アルバイトの女子と分かった。「論文作成、大変だよな。」等と言葉を重ねていくうち、ドウミ・バケット(バケットの半分)を買うようになった。1フラン50サンチームを渡すと、50サンチームを戻し、「論文頑張ろうね!」と言いながら、1フランだけを、いつも受け取った。トゥールーズの日常生活は、この様に、最初から、差別も偏見も怒りもなく、以前から、ここトゥールーズに住んでいた人達と同じように、日常の日々が、初めから穏やかに始められていった。

「南なまりや、アクセントが強い!」かもしれないと、渡仏前は、聞かされていたが、実際には、そんな場面はなく、「通常のスタンダードなフランス語」が話され、明快で、わかりやすく、私にとっての、「言葉の苦勞」は、なかった。

また、例えばスーパーでは、年老いた品の良い老女が、同じ年ごろのアングロ・サクソン系の女子がいるのに、あえて私に「この果物は、何ですか。どうやって食べるのですか?」と質問されたこともあった。その果物は「キューイ・フルール」であったが、当時のフランスでは、輸入されたばかりで、その老女にとっては、初めて見る、果物で、あったという。私は、「キューイ・フルーツと言って、そのまま皮を剥いて、生で食べられますよ。」と伝えた。そばに居た、金髪のアングロ・サクソン系の女子は、私の説明した言葉に、「そう、そう、ビタミンがあって、肌にもいいのよ!」と、続けてくれた。

大学院での講義でも、講義内容は「スタンダードなフランス語」であった。言語学専攻という学

---

キーワード：南フランス、トゥールーズ、ピレネー

問上での「特殊用語」が多く、講義の後、指導教官であるアリエール教授に、質問に行くと、“tu toiment”（親しい関係での言葉使い）だったので、日本でのフランス人教授が、“vous voiment”（形式的な丁寧な言葉使い）だったことの違いに初めは、驚いたが、どの学生へ対しても、アリエール教授は、親切に、“tu toiment”で、いつも難しい「言語学上の専門用語」を、分け隔てなく、教授されていたのが、懐かしく、嬉しい思い出となっている。

トゥールーズの街は、二面性をもっている。「バラの街」と称される、レンガ造りの家に赤い瓦屋根のガロンヌ河と運河の通る街並みは、かつて“TOLOSA”と呼ばれ、カエサル進行以前から存在し、パリが“ルテシア”と呼ばれていた当時には、南ヨーロッパの中心的都市であり、民主政治を行っていた。その中心の“キャピトル・広場”は、今も存続し、市庁舎があり、ヨーロッパ音楽祭で有名な、トゥールーズ・キャピトル・オーケストラの会場が併設されている。中世時代には、ローマ法王庁が移転を余儀なくされた時、「アルビーの法王庁」と呼ばれているが、隣接の小都市アルビーではなく、実際には、この南ヨーロッパの中心都市であったトゥールーズに、実際の法王庁は置かれ、その時の絵画が、市庁舎に大きく掲げられている。今でも、ヨーロッパ巡礼の中心都市となっている。

また、1968年には、フランス・イギリス共同の世界初、超音速旅客機（マッハ2）コンコルドが、ここ、トゥールーズからパリまでの試験飛行（15分間→現在は通常1時間）を行った。ヨーロッパ共同宇宙開発の拠点都市でもあり、ヨーロッパ中からの英知が集中している都市でもある。

このように、国際都市としてのトゥールーズは、「スタンダードなフランス語」が、当たり前前に流通していたのだろう。従って、私にとっても、「言葉の壁」は、なかったのであろう。

しかしながら、言語学の視点からは、違っている。

現在のフランス語は、「北のフランス語」を中心に、特に、革命後、フランス・アカデミーが、精査・琢磨して練られていった、外国人部隊にも通用する国際語的「スタンダード・フランス語」を造り上げ、監視してきた。日本語の「はい」→「OUI」。これに対し、南フランスでは、日本語の「はい」→「OC」。ここから、北のフランス語を“オイル語”とし、南のフランス語を“オック語”とした。さらに、南のオック語は、地域で3つに分かれ、バスク地方と接するガスコーニュ地方は、その影響から、東のオック語とされ、ドイツと接する西のオック語もその影響から西のオック語とされ、スペイン・バルセロナから始まり、フランス・ペルピニオンまで話されているカタラン語の影響を最も受けているのが、トゥールーズのあるオック地方の中央に当たる。しかし、街中でオック語を耳にすることはなかった。

フランス滞在中、私は、よくラジオを聞いていた。中でも、好きだったのが“ラジオ・モンテカルロ”と“フランス・ミュージック”。ラジオから流れる音楽は、日本と違い、ジャンル別では、なかった。1989年の私の好きだった2つの曲がある。一つは、オペラ歌手のパパロッチェーが歌った「カルソー」。そしてもう一曲が、トゥールーズ出身の歌手、クロード・ヌガロが歌った「TOULOUSE」。ラジオのDJが“Qelle belle chanson!”（なんと美しい曲!）と呻っていた。その歌詞の一説に、“-----, mon pays (pais), Toulouse…”という箇所があった。「我が故郷、トゥー

ルーズ」と歌っているのだが、「故郷」の発音が、“pays”（ペイ）→“パイス”とうたっているのである。大学院の講義の後、アリエール教授に聞いてみた。教授は、「彼は、あえて、オック語の発音で、我が故郷を強調したくて歌っているんだよ。」と教えてくれた。

南フランス・トゥールーズのオック語は、この様に、詩句や書物の中に、暮らしぶり・風土に根ざして、郷土愛の中で、現在も育まれている。日常会話は、「スタンダードなフランス語」になっていたとしても、この真の郷土愛は、作品の中に残り続けている。

そのことを知ってからは、新聞記事の中にも、時々使われる「南フランス・トゥールーズ」独特の“ことば”を集めて、その意味を教えてもらうようにした。

その土地には、その地域だからこそ生まれた“ことば”がある。そして、そこに根ざす人々は、その“ことば”を大切な時、詩歌や文学作品や新聞に載せていく。

この論文では、そうした人たちの想いが現在まで続いている、方言ではない、「南フランス・トゥールーズ」に残る“ことば”を、その語源や、例文と共に紹介していきたい。

主に、参考資料として、Jacques Boisgontier の“Dictionnaire du français regional du Midi toulousain et pyrénéen” /Editions Bonneton.2000. から例題を示したいと思う。

例題は、アルファベット順に示していく。

では、まず A から検証していく。

A - 1) ABAJOU (男性名詞): ブルベリーやコケモモの実・(植物) スノキの実  
ラテン語以前に起源を持つオック語の語彙で、山岳住民がよく使う。  
(CF. ピレネー山脈に囲まれた山岳住民での営みのことば)

EX) 《La jeunesse du Plantaurel se reunit au debut du mois d'aout pour aller Ramasser\* des Abajous\* sur la montagne.》 (J. VEZIAN)

Ramasser = cueillir. L'occitan amassar. オック語の ANASSAR: 他動詞・摘む。

「園芸家の若者(達)が 8月の初めに 山で コケモモの実を摘むために 集まる。」

A - 2) ABRACADIS (男性名詞): 牛肉のあばら肉(リブ)の料理  
オック語の動詞: ABRACAR から派生した言い回しで、トゥールーズの肉屋が使う。

A - 3) ADIEU: 一般的・特に北のフランスでは、(( ← A + Dieu))「神の御前」にて、会えるという、今生の別れ、永遠の別れの時に発する「さらば!」を意味する、別れの言葉である。  
「この言い回し」を、トゥールーズの古い年代の人達で、古くからの親友であり、“tutoiement”(親しい関係での口調・言い方)できる間柄の友人関係にある人達の間では、特にオック語を知る南フランスの人間関係において、休暇を取る友人

にも、親しみを込めて、「この言い方」を使う。

オック語：ADIU から派生した言い回し。

EX) 《EH, Adieu\*! S'écrie, à la stupefaction du Parisien, un habitant de la Ville rose non enquittant, mais en abordant un vieil ami, il veut lui dire Bonjour!》 (G. LEBLANC)

「へい、さらばだ！ 手紙をかいてくれよと伝えて、(なんで言ったら) パリジャンは、驚くに違いないが、バラの街(トゥールーズ)を離れない住人なら、昔からの友人に、挨拶がしたいのさ。」

A-4) AFART (男性名詞)：たっぷりとした食事

ラテン語“FARCTUS”の過去分詞から派生し、オック語の動詞“S'AFARTAR”へ。  
(食べ物がたくさん喉を通る→食べ物をたくさん飲食する。)意味となるが「祝いの時使うことば」となる。

(CF. クリスマスの前夜だけは、子供達がすべての村人の家を訪れてお菓子や飲み物・食べ物を分けてもらう、子供たちに開かれた門戸の日があり、にぎわったのであろう。  
日本でも、各地に、お祭り時の、似たような風習があるように思う。)

EX) 《La veille de NOEL, avant L'AFAR\*, repas substantiel d'avant la messe de Minuit, les enfants circulaient dans les rues du village.》 (R. JALBY)

「クリスマスの前夜、真夜中のミサ(に行く前の)たっぷりとした食事(L'AFAR)を、子供達が村の通りを行きかいて、食べている。」

A-5) AGACE, AGASSE (女性名詞)：(鳥)カササギ。羽が白と黒でまだら。

珍しくゲルマン語派に起源を持つ、オック語の女性名詞：AGASSA が起源。

EX) 《Voyez donc comme il monte! On voit bien qu'il s'est risqué plus d'une fois Pour manger des oeufs d'AGACE\* dans les nids.》 (E. POUVILLON)

「また、のぼっているのを見てよ！ 鳥の巣からカササギの卵を食べようとして、何度も危険な目にあっているのを見ていたんだから。」

A-6) AGRAGNOU (男性名詞)：(食物)リンボクスローの実・プラムの実に似る。

ラテン語文化以前からの起源を持つオック語起源。

A-7) AGRANER (動詞)：(釣り)で 餌をつける。

オック語動詞：AGRANAR が起源。

EX) 《Il faut en prévoir une quantité suffisante pour pouvoir encore une journée "AGRANER"\* à intervalles afin de fixer le poisson sur le coup.》 (M. THOUREL)

「群れの魚を仕留めるには、十分な間隔をあけて、“AGRANER” 餌を付けておき昼間のうちに、十分な量を取れる準備をしておかなくてはならない。」

A-8) AILLADE (女性名詞)：茹でたニンニクをベースとしたスープ。

食べられないほどの香辛料をかなり効かせたスープで、結婚式の夜に出される。

オック語：ALHADA が起源。

“AIL” は、南フランスでは、「ニンニク」を示す。

EX) 《Pendant qu'on secoue ses puces ici, les mariés s'en vont. Si nous préparions “L'AILLADE” \* ? Après pour leur server, ce sera le diable.》 (R. ESCHOLER)

「この、ノミを払っている間に、新郎・新婦は行ってしまった。

もし、アイヤードスープ（ニンニク入りの強烈な香辛料の入ったスープ）を用意して、彼らに出していたら、その後が、大問題になってたかも。」

「新郎・新婦には、そんな辛い思いをさせないで、旅立ってほしい」という思いからの、あえての“言い回し表現”である。

南フランスでは、ニンニクのきいた料理が多く、現在フランス語にも残っている。

CF. “AILLADE” ← プロヴァンス語 “ALHADA” が起源とされる。

“アイヤード” と呼ばれる料理名で、1) ニンニクを強く効かせたクルトン または、2) ニンニク入りドレッシング、のことで、現在は使われている。